

領域「言葉」支える環境
—乳児絵本の読み聞かせを通して—

Environment to support “Language”
—Through reading picture books to babies—

松田 智子
Tomoko MATSUDA

I. はじめに

近年、赤ちゃん学が飛躍的に発展し、言葉を発する前の乳児のコミュニケーションについて、世界各地で実証的な研究が行われている。それにより明らかになった新たな知見を活用しながら、乳児の言語環境と乳児絵本の重要性について考えたい。

日常生活の場で身近な事物や事象に直面し、身近な人々と経験を共有したり、多様な感情を経験したり、コミュニケーションを交わしつつ、乳児は言葉を獲得していく。その過程で自己の感情を表現したりコントロールしたり、相手とお互いに理解あおうと声を掛け合うなどの経験を通して、その場に適した言葉を豊かにしていく。このような意味において、言語環境でもっとも重要なのは、乳幼児と多くの経験を共有する家族や保育者の在り方である。つまり、彼らの乳児に対する、即時的で応答的な対応の在り方である。また、直接に経験できないような外の世界を乳幼児に提供する、絵本等の豊かな文化財との出会いである。

本稿では、特に0歳児後期から2歳未満児に見られる語彙爆発と呼ばれる時期に焦点を当てて、言葉を獲得する過程で、乳児絵本がどのような役割を果たしているかについて考える。まず、乳児の発達段階の特徴と代表的な乳児対象の絵本を重ね合わせて分析する。次に、周囲の身近な大人や保育士等による、絵本の読み聞かせの役割について論じる。

II. 初語のはじまり

乳児は、1歳少し前になると、最初の言葉である初語を、発するようになる。今井・針生は、初語について、「子どもが決まった状況や対象を指すのに決まった音声形式を使っていることが周囲の大人にもわかり、初めて言葉と認められた音声形式」¹⁾と規定している。実際の初語が意味する内容は、自分に気持ちよく対応してくれる周囲の人のことだったり、好きな食べ物のことだったり、家にいるペットのことだったと、快と感じるものが多い。このような初語が出たからと言って、乳児はそこから急速に分かる語彙数を増やしているわけではない。この時期はゆっくりと、自分の生活の中で新しい言葉と出会う経験を繰り返し積み重ねながら、語彙数をたくわえていくのである。

しかし、それから半年ぐらいが経過すると、乳児が1日に10個程度の新しい語を覚える嵐のような時期が訪れる。しかもたった1度だけ、周囲の人がその語を使用する状況に接しただけで、その言葉の適切な使い方を覚えているという。周囲の大人を驚かすこのような現象は、語彙爆発と言われており、子育ての一般的な経過ではよく知

られていることである。

このたった1度の単語の使用に接しただけで、その語を正しい意味と関連付けて対応付ける能力のことは、即時マッピングといわれている。この即時マッピングは、大人が考えている以上に複雑な思考を要する。例えば、コップに入ったミルクを大人が初めて子どもに渡して、「はい、ミルクよ」と発声した場合、子どもはコップ自体をミルクというのか、中の液体をミルクというのか、コップの模様がミルクなのか迷うはずである。しかし実際には新しく出会った語の意味をほとんど間違わずに対応するという。つまり、乳児にとり即時マッピングが可能であるということは、それ以前の時期に「ミルク」という音声を切り取って、それが使用される状況と、その言葉の意味を推測して関連付けることができる言葉の土台が、乳児のなかに経験として積み重ねられ育っていることになる。

III. 言葉の土台を育む時期

前言語期の乳幼児にとって、言葉を獲得する土台は4つある。それは、音声を聞き分ける聴力の発達、音声を発するための構音能力の発達、人や物を通したコミュニケーション能力と認知力の発達である。

(1) 聴力の発達

言葉の理解には、音やリズムの違いを聞き分ける音声感覚の発達が不可欠である。近年の研究では、乳児は誕生直後から言語音と機械音の違いを聞き分けていることが明らかになり、初語が出現する前から音声知覚能力は著しい発達を遂げていると分かった。ただ泣いているだけに見える乳児に対しても、大人や保育者はあやしたり語りかけたり歌を歌ったりして、音に対しての感受性を豊かにする支援をする必要がある。

(2) 構音能力の発達

聴力とともに、土台として必要なものは、構音能力を身に付けることである。4か月ぐらいから喃語が表出され、乳児は自分で「あーあー」などの音を出しているが、これは遊びながら自分の出す音を様々な方法で確認しているのである。喃語の最初は母音だけであるが、だんだん母音と子音をつなげた「ばー」「だー」などの音を発生し、繰り返し出すことができるようになる。これに伴い、体の運動機能も発達し手のリズミカルな動きも一緒に見られるようになり、全身を使って音声を表出しているよう見える。この表出時期は周囲への関心が高くなり、大人の音声を聞いて反応したりその態度を模倣したりする。そのため、それに誘発されるように、周囲の人からの多様な音声や動作による働きかけが増加する。この周囲からの働きかけが、乳児の耳から音韻を確認する経験を、増加させている。

(3) コミュニケーション能力の発達

特に9か月ころから大人の視線を追いかけたり、大人の見ている対象に乳児が視線を重ねたりする、共同注意が現れる。また、乳児は自分から物を差し出して大人の注目を引こうとしたり、自己の要求や興味を知らせようとしたりする指さし行動を始める。この指さしの現象は、乳児と大人と物で構成される三項関係の成立を示すもので、コミュニケーションの発達にとり重要な行動である。指さし行動とは「指先の延長線上にある対象を周囲にある他の事象から抽出し、指さす行為」²⁾であると定義されている。宮津は、指さし行動には、誰かに対して働きかけるのではなく、喃語や自分に対して行う独り言のような「一人指さし行動」と、他者に自分の意図を伝えるコミュニケーションとしての機能を備える「伝達的指さし行動」があり、前者から後者に進むという³⁾。つまり、乳児は指さし行動により、自発的に他の物と自分が意図する物とを、切り分けて他者に伝達していることになる。

さらに宮津は、指さし行動と言葉の発達において、「一語文が出ると、『伝達的指さし行動』が多くなる」⁴⁾と述べている。宮津の検証によると、1歳半ごろになり、より複雑なコミュニケーションを使用するようになると、指さし行動は急激に増えるという。この時期における指さし行動は、「一人指さし行動」と「伝達的指さし行動」が

両方とも高い頻度で出現しているという。2歳近くになり、1語文から2語文へと進んでいくのと合わせて、乳児の語彙獲得は指さし行動と相乗効果を生み出し、周囲の大人とのコミュニケーションがよりスムーズになるという。しかし、乳児が2語文を話すようになると、乳児の囁語や独り言とともに出現した「一人指さし行動」は消滅に向かうことが観察されている。

(4) 認知力の発達

また今井・針生は、乳児の指さし行動が画期的に増加するこの時期を、「単語を何かの指示対象と対応づけようと取り組んでいる」⁵⁾時期だと述べている。これは、先述した単語と指示対象をマッピングする基盤を育てている時期とうまく重なる。今井・針生はさらに次のように言う。

0歳後半から1歳すぎにかけて、子どもは様々な手掛けかりを使って発話の流れの中から決まった、「音素のまとまり」を切り出すことができるようになる。そしてさらに、その「音素のまとまり」が、何か意味を担っていことを理解し、それを指示対象と結びつけようとするようになっていく⁶⁾。

耳にした新しい言葉の適切な意味を、乳児が見つけるには、話者（母親や保育士等）がどこを見て話していたかに注目をする必要がある。つまり乳児が、他者の注意に自己の注意を、重ね合わせができる共同注意という能力が求められる。この能力は乳児の0歳代後半に目覚ましい進歩を遂げることが、近年は科学的に証明されている。乳児は6か月頃までは、相手の視線が動くと同じように自分も視線を動かしているが、1歳頃になると相手の視線の先にあるものと相手の顔を交互に見比べながら、相手の見ているものと自分が意図しているものが、合致しているかたえず確認するようになる。このような共同注意が飛躍的に発達する時期と、耳にした言葉の中から「音素のまとまり」を取り出し、それに何らかの意味付けを行う時期や、指さし行動が増加していく時期が重なる。次に、この共同注意や指さし行動の発達を促す有効なツールとして、乳児対象の絵本を考えていくこととする。

IV. 乳児対象の絵本

近年は赤ちゃん学が飛躍的に進み、0歳児から3歳児未満までの言葉の獲得過程の不思議さについても、科学的な解明が行われるようになった。やっと追視ができるようになった生後4か月ぐらいの乳児を対象に、絵本の読み聞かせを行うと、絵本をまったく見ていなかったり、目が一点に止まらずあちこちきょろきょろしていたりすることが多い。その後6か月ぐらいになると、相変わらず絵本をじっと見ることはあまりないが、読んでくれる大人の顔ばかり不思議そうに見るようになる。これは乳児にとっては、物より人のほうが多元的な刺激対象であるため、人の顔に対して興味関心が高くなるからである。個人差はあるが月齢が進むと、絵本も読み手の顔も両方を見るようになり、大人の声の調子や大人が指で示すものに反応して、「あーあー」や「うーうー」と声を出すようになる。このようにして、絵本という物と乳児と大人の三項関係が成立していく。

9か月ぐらいになると、大人が、絵本を指でさしながら声をかけつつ読んでやると、徐々に乳児がじっと絵本を見る時間が増加していく。同じページを何度も見たり自分でページをめくったりするだけでなく、大人の真似をして指差し行動や発語が見られるようになる。そして1歳ぐらいになると、大人に対して自発的に指さし行動や単語を介して、お気に入りの絵本を読んでほしいとねだるようになる。

日本には、「赤ちゃん絵本」というジャンルが存在する。これは、0歳から2歳までの読者を中心とした絵本の総称であり、ファーストブックとも呼ばれている。「赤ちゃん絵本」は、乳児が経験する身のまわりのものや日常生活の中で起こる様々な出来事を題材にするのが基本である。それをテーマ別に分類すると大きく3つに分かれしており、それらは「ものの絵本」、「生活の絵本（遊びやしつけを含む）」「オノマトペの絵本」である。これらの本の

特徴は、ストーリーはほとんどないこと、ページをめくるたびに物が羅列的に並んでいること、繰り返しのリズムがあることである。

(1) ものの絵本について

これは、いわゆる認識絵本と呼ばれるものの一つである。一般的に認識絵本は、対象をはっきりと把握しとらえることをねらいとしている。つまり、乳幼児の身の回りのものやことに焦点を当てて、その形や仕組みを乳幼児に分かりやすく表現している絵本と言える。特に、乳児を対象として取り上げられる絵本の題材は、彼らの興味関心を引き付ける、食べ物や動物や乗り物に関するものが多い。

しかし「ものの絵本」は、乳児にものの名前を教えることを目的とするものではない。まずは乳児が、日常生活の中で見ているものやことを、絵本の中で再確認することにより、自分の知っているものとの出会いを楽しむことを第一のねらいとしている。つまり、乳児が自分の知っているものやことを見つけた時の喜びを引き出すことや、耳からの言葉（音韻）と「もの」や「こと」とのマッピングの機会を多く設定することをねらいとしている。

また、大人が乳児に、「わんわんだね、おかあさんつよそうね。」「おそとで、わんわんみたよね」と語るときに、耳に入ってくる言葉（音韻）によって、読み手と聞き手が絵本を媒介としてお互いに共感し合うこともねらいとする。乳児の見知らぬ物が絵本に登場すると、「これは、ぞうさんだよ」と、大人が指さしながら語りかける落ち着いた音声の響きや安心できる雰囲気のなかで、新たなものやことに音韻とともに出会う機会となる。乳児はこのようにして、絵本に登場するものやことを介したコミュニケーション（指さし行動も含む）を通して、周囲の大人との信頼関係を深めるのである。この信頼関係の上にたち、乳児は「ぞう」という耳からの新たな音韻とものを、言葉としてマッピングする経験を重ねることになる。

この絵本の代表的なものとして、食べ物では『くだもの』（平山和子作 福音館書店 1981）、動物では『どうぶつのおやこ』（薮内正幸作画 福音館書店 1966）、乗り物では『ぶーぶーじどうしゃ』（山本忠敬作 福音館書店 1998）があげられる。

(2) 絵本『どうぶつのおやこ』の分析

『どうぶつのおやこ』は、長い間、乳児に愛されてきた本である。タイトルの通り、様々な動物の親子が登場する。見開き1ページに1種類の動物が丁寧な筆致で描写されている。動物の蹄や尻尾の毛並み1本1本まで丁寧に描かれ、その息づかいまで聞こえそうである。まさに動き出しそうな動物本来の特徴だけでなく、迫力や美しさも備えている絵である。さらに読者をひきつけるのは、登場する動物の親子の絆である。子どもを見つめる親に漂う凛とした強さ、子どもの無邪気な愛くるしさが対照的に描かれている。

絵本を介してコミュニケーションが生まれやすいように、登場する動物の順番が身近なねこから始まり、うさぎ、いぬ、くま、ぞうと乳児の日常生活との距離を考えて配置されている。文字も背景もない白抜きの見開き空間に、意図的に動物の親子のみを配置するというシンプルな構図が、画面に力強い印象を与えている。この配置と構図により、乳児に見せたい情報が最小限かつ丁寧に整理されているため、実物を写した写真絵本よりも乳児の目をひきつける。絵本ならではの、存在感を発揮している。

乳児対象の絵本で、背景がないいわゆる白抜きの手法で描かれている例は、他にもいくつかある。これは乳児の発達特性に合致した手法である。彼らは、興味のあるものは長く見つめるが、見慣れない新しい動くものにすぐに興味が移るという特性を持っている。そのため、乳児が一つの画面を長い時間、言葉の意味が分からないうまに見つめることは困難であり、多くの情報が混在する画面から重要な情報を見つけ出すことは無理がある。彼らは、瞬時に描かれていることが認識できるものでないと、見ることに飽きてしまう特性を持っているのである。

(3) 生活の絵本について

赤ちゃん絵本の多くは、生活=遊び・しつけの中に入ってしまうが、とりわけ遊びの要素をクローズアップさせた絵本は、乳児と一緒に体を動かしたり声を出したりして楽しむことができる。例えば、『いない　いない　ばあ』(松谷みよ子文／瀬川康男絵 童心社 1967)などは、日本の昔からの伝統的な遊びを取り入れており、乳児は声を出して全身で楽しむ。しつけの絵本では、トイレトレーニングをテーマにした、『ぷくちゃんのすてきなぱんつ』(ひろかわさえこ作 アリス館 2001)は、子どもと大人が乗り越えなければいけないトイレトレーニングのハードルの高さも、楽しみに変えてくれる絵本である。

(4) 絵本『いない　いない　ばあ』の分析

『いない　いない　ばあ』は、「いない　いない」で顔を隠し、「ばあ」で再び顔が現れるという、世界各地で昔から見られる単純で明快な遊びの絵本である。絵本の中では「いない　いない　ばあ」という言葉が繰り返されていくが、この単純なリフレインは、単純だからこそ乳児の心に安心感をもたらして笑いを引き起こすのである。

登場する動物がすべてまっすぐに正面を向いているので、読者である乳児は、この遊びに自分が参加しているように感じる。これも乳児の絵本の特徴であり、特に登場人物が擬人化された動物の場合、主人公と乳児の視線がぴったりと合うように描かれている。

縦書き横開きになっている絵本であり、2場面を連続する1セットとして、遊びが展開する構成になっている。まず1場面目の右に「いない　いない」の文字、左にいないスタイルで顔を隠した1匹の動物が登場する。ページをめくった2場面目には、右に「ばあ」と隠した顔を現した動物、左に大きなポイントで「ばあ」の文字が出てくる。この2場面が連続する1セットという仕掛けが、乳児と動物が面と向き合って対話するような構造を生み出している。さらに、「いない　いない」の1場面目の動物の尻尾は右側に振られているが、次にめくった「ばあ」の2場面目の動物の尻尾は左側に振られており、この2つの場面の連続する動きが、登場する動物たちに躍動感を与えている。絵本のページをめくること自体が、直接に遊びにつながるという、優れた構成になっている。この単純で明快な遊びを、ねこ、くま、ねずみとつぎつぎと繰り返すことにより、乳児の期待感とともにこの遊びが盛り上がりしていく仕掛けになっている。

動物たちの形は、乳児にもはっきりと分かるフォルムで描かれており、色彩は何層にもなっており落ち着いた色調である。乳児は生後3月ほどたつと、形や色の判別は可能になるという。そのため、このようにシンプルな形で構成された絵本ならば、1歳未満でも楽しむことができる。特に乳児は、人の顔には興味関心が高く、人の顔の判別はもっと早い段階から可能であるという。つまり、この絵本は、乳児のこのような発達特性に合致している。

(5) オノマトペの絵本について

オノマトペとは、擬音語・擬声語、および擬態語の総称であり、これらをメインに作られた絵本がオノマトペの絵本である。擬声語は、「ぱたん」や「わんわん」などの実際の音や声をまねてつくった言葉であり、擬音語は「がたんごとん」「ざあざあ」などと本当の音に似せて作りだされた言葉である。このように擬音語や擬声語は、実際の音や声をなぞった語であるが、擬態語は何かの状態や様子を言語音で表現したものである。例えば「にっこり」「しゃーん」などの擬態語は、動きや様子をなどの音でないものを、あえて音のように表現することにより、直接的に人の感覚に働きかけてくるようにつくられている。

オノマトペの研究の日がまだ浅いためか、これが乳幼児の言葉理解や語彙増加に役立っているという実証的な研究は少ない。しかし、日本の赤ちゃん絵本にはオノマトペがあふれているし、実際の保育現場においてもオノマトペは保育者と乳幼児のコミュニケーションにおいて、とても重要な役割を担っている。

どうして大人は、乳幼児を相手にすると、オノマトペを使用して語りかけてしまうのだろうか。それについて今井、針生は次のように説明する。

大人が子どもに対して無意識に擬態語を多用してしまうのは、それを話すときのリズミカルな調子の良さもあるだろうが、やはりどこかで擬態語は音で対象の状態や様子をなぞったものなので、たとえその擬態語を耳にするのがはじめてでも、聞き手はその意味をたやすく推測できると考えているからだろう⁷⁾。

彼らは、擬態語が指すものが動きのパターンとしての動作であることに視点を当てて、擬態語が子どもの語彙獲得の過程で、動詞の学習を助ける橋渡し的な役割を果たしていることを、大人や子どもや日本語を母語としない人を対象とした実験を通して明らかにした。つまり、大人が子どもに対して擬態語を多用するのは、大人の直感通り、子どもの語彙獲得にとり意味があることだった。そして彼らは、擬態語を理解するためには、言葉の意味そのものよりもその音が動きのパターンにマッチしていると分かる感覚が、重要であることを検証した。彼らは、子どもが擬態語の意味を推論するためには、幼少時から日常生活の中で多くの擬態語に接することにより、ある状況や様相に関連付けた音韻感覚を養うことが必要であると提案している⁸⁾。しかし、乳幼児が養るべき音韻感覚とは具体的にどのようなものなのか、今のところ研究では明らかにされていない。

オノマトペの代表的な絵本として、『もこ もこ もこ』(谷川俊太郎文／元永定正絵 文研出版 1977) や『しろくまちゃんの ほっとけーき』(わかやまけん作 こぐま社 1972) などがある。

(6) 絵本『もこ もこ もこ』の分析

『もこ もこ もこ』の絵本は、オノマトペの音と抽象画が結び付いて、不思議な世界を展開している。特に言葉は「もこもこ」「にょきにょき」「ぱく」「もぐもぐ」「つん」「ぼろん」などの、日本語独特のオノマトペのみで構成されている。絵は、抽象的であるが美しい色彩で描かれている。小さな突起物が「もこ」と現れ、徐々に大きくなり限界に達すると、破裂して四散する。すると場面は最初の「しーん」の世界に戻る。そこにまた「もこ」と突起物が現れ、この営みがエンドレスに続く構成になっている。

この本は出版当時、大人から評価を受けることがなく、10年ほど売れなかったという。しかし、保育現場等での読み聞かせを通して、乳児が絵本にあわせて夢中になって体を動かして遊び楽しむ姿に接した保育士等の口コミで、良い評判が徐々に大人に広まったという。筆者は、保育園の2歳児クラスでの、この本の読み聞かせを参観したことがあるが、乳児の反応の良さに驚いた。読み手の言葉をそっくりまねておうむ返しに繰り返したり、リズムに合わせて体を動かしたりと楽しい時間が過ぎていった。言葉を獲得する前の乳児は、オノマトペの意味を言葉として捉えるよりも、そのリズム感覚を全身で受け止めて遊んでいるようだった。

乳児の聴覚は、視覚よりも早くから発達していて、胎児のころから音を聞く能力があるという。そのため乳児はオノマトペの意味を理解する能力はなくても、そのリズムを楽しむ能力は備えている。岡本は新生児の相互同期的行動を引用して次のように言う。

もともと乳児自身、リズム的な活動を潜在させており、リズムを持つ環境刺激に対しては同期的に反応しようとする傾向を持つこと、そして人のスピーチは、他の刺激音に比して、はるかに乳児が同期しやすい刺激としての性質をその中に備えている⁹⁾。

今井と針生は、生得的な感覚とオトマトペを関連付けた上記の論に、次のように付け加える。

擬態語をめぐる一番の謎は日本語母語者(特に大人)にとって、それを使った時に非常に「ぴったりくる」、他の一般的な形容詞などを使ったのでは表現できない微妙な違いまで表現できて「しっくりくる」感じがするのに対し、日本語を外国語とする人々には最後までその感覚が理解しがたく感じ取られるということである。擬態語は一見、対象を音でなぞっているようでありながら、実は、そこには、長い間その言語を使うことでしか

わかるようにならない、その言語ならではの音韻感覚が含まれている¹⁰⁾。

日本語は、豊かなオノマトペを持つことを特徴とする言語である。乳児のときから、多くのオノマトペの絵本の読み聞かせを通して日本語独特の響きにふれることは、母語への感性を磨くことにつながる。

V. 言葉の発達と読み聞かせ

乳児保育の質が子どもの言葉の発達に与える影響を調査したアメリカの研究によると、3歳未満の乳児の認知力と言葉力の育成に一貫して関係していたのは、「応答的で敏感な保育と言葉の刺激」だという。ここでいわれる言葉の刺激とは、「子どもに質問をする」「子どもの発声や発話に反応する」「子どもに否定的でない話しかけをする」というもので、これらが乳児の言語発達に重要と確認されている¹¹⁾。具体的には、子どもが絵本のだるまを指さして「あか」と言ったら「そうよ、赤いね大きいね」と、子どもが注意を向けている対象について追加の情報を与えることである。子どもが絵本のパンを指さして「あっあっ」というと、「美味しいよね、食べたよね」と共感しつつ子どもの発話に反応することである。保育者が絵本を見ながら「これなあに」と子どもに聞いたとき、猫を犬と答えても、「そうだね、好きだよね、にゃんにゃんだよね」と、いったん受け止めてから正すようにすることである。

また、これらの刺激を与える適切なタイミングについても、アメリカで30年にわたり研究されているという。言葉の発達に有効な刺激には、適切な時期があるというのである。研究結果は、「共同注意中の発話が多いと子どもの語彙数が多くなり、逆に子どもが注意を向けていない対象に注意を向けさせようとする発話が多いと、子どもの語彙獲得に負の影響が出る」というものである¹²⁾。つまり、大人や保育者が乳児に言葉をかける際に、共同注意中かどうかにより、同じ内容でも言語の発達に与える影響に差が出ることになる。絵本を介して3項関係が成立している読み聞かせの時は、共同注意中なので、保育者の多様な声掛けがおおいに有効であると言える。

さらに、大人や保育者が、語彙獲得を促す声掛けをするその乳児の月齢により、声掛けの方法を変える方が有効であると、アメリカの研究で明らかにされた。1歳半以前の乳児の時は「即時性」と「随伴性」と「適切さ」が重要で、2歳前では、「語のタイプの多さや発話の複雑さ」が重要であるという¹³⁾。つまり、1歳半前では、絵本で兔を見ている時は、「うさぎさんよ、ねんねしているね」と発話に対してすぐに反応を返すことや、乳児の行為や言葉に関連したことを刺激として与えることが大切である。2歳前では、絵本を見ているときに「白いうさぎさんがねんねしているね、ふわふわしているね」と語のタイプを多くして発話を複雑にしつつ対応することが大切である。これは、乳児が知っている言葉の数がある程度のサイズになり、1歳半ごろに語彙爆発という現象起こる時期と重なっている。

日本の子育ての中でも、月齢による声掛けの違いの重要性が言われている。「わんわんはどこですか」とクイズ形式で質問をして、大人が乳児の発達に合わない指さし行動を促す時期が、早すぎる弊害である。1歳前後の乳児へのこの問い合わせは、絵本への集中力を削いで、注意力を散漫にすることになるだけでなく、対象物の再認識の喜びの機会を大人が先取りすることになる可能性が高いという。この時期には、大人は自発的に既知のものを再発見した喜びを、伝達的指さし行動で示そうとする乳児の共感者であることが望まれる。乳児に「車はどれかな」と質問して指さし行動を促そうとする刺激は、1歳半以降のもっと多く言葉が出てくる時期を待つ必要がある。

VI. 乳児絵本と読み手

乳児が絵本を読むということは、読み手である大人と同じ場で同じものを見て、共感したり新しい発見を共有し

たり、心を通わせながらコミュニケーションをすることである。これが、先述した共同注意の始まりである。乳児は絵本を通して共同注意を育み、大人と同じものに視線を向けることにより、そのものの楽しさや面白さに気づいていく。

絵本は、人がその間に介さなければ、乳児にとっては単なる物にすぎない。赤ちゃん絵本は、身近な大人が語り手となってこそ、はじめて絵本としての機能が発揮される。つまり、大人が行う絵本の読み聞かせを通しての視線や動作や音声のやりとりこそが、乳児のコミュニケーションの発達を支援し、お互いの信頼関係を育むのである。

昨今は、バック音楽付きの読み語り絵本が販売されているが、どんなに素晴らしい作られても、やはりそれは物でしかない。人が乳児に果たす機能には、到底かなわない。岡本は乳児にとっての「人」という存在の特徴と、読み聞かせの意味について次のように述べる。

「人」は「物」と異なり①意図をもって子どもに関わってくる相手であり、②子どもと同じ人間として動作的にも情動的にも同型の構造を持つ相手であり、③様々な場面に登場し、様々な機能を果たしてくれる相手であり、④つねに子どもの興味や探究心を引き起こす課題場面を作り出してくれる相手であり、⑤人間としてすべての感性経路をフルに総動員して働きかけてくる相手であった。（略）重要なのは、ただ子どもと動作や微笑みを交換するというだけでなく、2人の間に「物」がとりいれられてくることである。子どもは「人」が「物」に施す扱い方を見ながら、自分もその物に対する対処の仕方を学んでいく。それはその物に対する一つの意味付けの学習にほかならない¹⁴⁾。

「赤ちゃん絵本」は、大人と共有されることにより、その機能を果たすことが、明らかになった。絵本がどんなにすばらしくてもその読み手が、岡本の言うような特徴を備えた「人」でなければ、「物」で終わってしまう。また、反対に絵本は一つの「物」でしか過ぎないが、読み手が乳児の身振り、発声、表情を観察しつつ丁寧に対応刺激を繰り返す読み聞かせは、乳児の言語発達を促すといえる。

引用文献

- 1) 今井むつみ、針生悦子『言葉をおぼえるしくみ』p16 ちくま学芸文庫 2014
- 2) 室岡弘明『自閉症性障害児の指さし行動と諸要因の検討』p133-142 情緒障害教育研究紀要
- 3) 宮津寿美香『発達に伴う「指さし行動」の質的変化』p30-37 「保育学研究」第56号巻第2号 2018
- 4) 同上
- 5) 今井むつみ、針生悦子『言葉をおぼえるしくみ』p46 ちくま学芸文庫 2014
- 6) 同上 p46
- 7) 同上 p221
- 8) 同上 p203-p 224
- 9) 岡本夏木『子どもとことば』p24 岩波新書 1982
- 10) 今井むつみ、針生悦子『言葉をおぼえるしくみ』p221 ちくま学芸文庫 2014
- 11) 小椋たみ子『赤ちゃん学で理解する乳児の発達と保育第3集 言葉・非認知的な心・学ぶ力』p20 中央法規出版（株） 2019
- 12) 同上 p20
- 13) 同上 p20
- 14) 岡本夏木『子どもとことば』p46 岩波新書 1982

参考文献

- 生田実秋・石井光江・藤本朝巳『絵本入門』ミネルヴァ書房 2013
杉浦範茂『絵本の読み解く』NPO 読書サポート 2015
生田実秋・藤本朝巳『絵を読み解く絵本入門』ミネルヴァ書房 2018
藤本朝巳『絵本のしくみを考える』日本エデュケータースクール出版部 2007